

日本奥山学会設立趣意書

かつて我が国の「奥山」には、落葉広葉樹を基盤とする巨木の原生的な森が広がっていた。そこはクマをはじめとする野生鳥獣の宝庫であり、種々雑多な植物と種々雑多な動物が密接に関わりあいながら、絶妙のバランスの上に奥山生態系を保全していた。この森から大量に湧き出す滋養豊かな水によって、平地や川・海にすむ全ての生き物たちの営みも支えられていた。これらの森は、人間が立ち入らないことで、祖先たちによって保全されていた。祖先は、棲み分けによって、野生鳥獣たちと共存していたのである。

しかし、第二次世界大戦後、人間は一方的にこの棲み分けラインを乗り越えて、奥山に入り込み、奥山開発や拡大造林政策により、豊かな奥山を次々と皆伐して公園化または針葉樹林化し、その跡は放置して荒廃させている。戦後に失われた奥山の原生的な森の面積は、東北6県分に相当するまでの広大なものであった。

野生鳥獣をはじめとする森の生き物たちは、残された森で命をつないできた。しかし、近年、この残された森さえも、ナラ枯れをはじめとする原因不明の異変やシカの進出による食害により衰退し、昆虫から哺乳類に至るまで、生き物たちが生きられない場所になってきている。

奥山の荒廃や異変は、野生生物たちの生存を危うくしているだけでなく、森林の保水機能の低下をももたらし、湧水の減少や枯渇、豪雨時の山崩れや洪水等の災害を誘発することにより人間の生存をも脅かすようになってきた。

こうした奥山の危機的状況に対して、既存の学問領域の枠を超え、個々の研究者による様々な実証的研究の成果を再構成し、奥山保全・復元・再生をテーマとする新たな総合的かつ専門的な研究領域を設けることの必要性を感じ、私たちはここに日本奥山学会を結成する。学会結成によって次のようなことを実行する。

- ・奥山荒廃問題に関する新たな研究領域を開く。
- ・研究者間のアクセスを容易にする。
- ・全国の奥山研究者に呼びかけ、広く会員を募ることで、研究の相互交流を図る。
- ・年次研究大会、研究誌の刊行、定例研究会の開催によって奥山研究の水準を高める。
- ・若手研究者の育成、在野の研究者の発掘を行う。
- ・海外の研究者や学会、大学等研究機関との連携を図り、研究の質を練磨するとともに、国境を越えた自然保護運動に寄与する。
- ・日本学術会議協力学術研究団体への登録をめざす。

当学会結成が、わが国の奥山に豊かな森を保全・復元・再生し、全ての生命が尊重される持続可能な社会を再構築することに大きく寄与することを願ってやまない。海外に向けては、文明を支える奥山水源の森の保全方法を示し、国際貢献としたい。全国の、自然を愛し自然に畏敬の念を持つ、良心的かつ心意気のある研究者の参加を望む。